

## タガログ語の所有と存在のあいだ\*

長屋 尚典

nagaya@tufs.ac.jp

キーワード: タガログ語 所有 存在

### 要旨

タガログ語の所有文と存在文の形式的類似は言語類型論の文脈で繰り返し指摘されてきた。両者には同じ述語が用いられ、所有者と存在場所の格標識の違いによってのみ区別されるからである。しかし、本論文では、その形式的類似性にもかかわらず、所有構文と存在構文は表現できる意味が大きく異なっており、はっきり区別されると主張する。すなわち、所有権関係、親族関係、全体部分関係は所有文のみによって表現され、同じ名詞を利用しても存在文では表現できず、両者に連続性はない。さらに、本論文では、この所有と存在の違いがタガログ語の文法を貫く特徴であることも指摘する。具体的には、タガログ語の名詞句内での所有表現や、所有者述語文・所在文にも同じ特徴が見られると主張する。こうして、類似性ばかり強調されてきたタガログ語の所有と存在のあいだは、見た目以上に大きく離れている。所有を存在に還元することはできない。

## 1 はじめに

タガログ語の所有文と存在文はともに特殊な述語 *may* を用いて表現する。所有の意味を持つか、存在の意味を持つかは構文によって決定される。すなわち、所有を表現する場合、(1) のように、「**may + 所有物 + 所有者 (主格)**」という構文をとるが、存在を表現する場合には、(2) のように、「**may + 存在物 + 存在場所 (場所格)**」という構文をとる。両者の違いは、主格 (→所有者) と場所格 (→存在場所) のどちらを用いるかという格フレームの違いでしかない。<sup>1</sup>

- (1) May      pera      si      John.  
EXS/POSS money P.NOM John  
「ジョンはお金がある。」

\* 本稿は、2017 年 6 月 25 日に開催された日本言語学会第 154 回大会におけるワークショップ「所有の言語学: *To Have, or Not To Have*」で著者が行った発表に基づいている。本稿およびそれに基づく発表については以下の方から貴重な意見および情報をいただいた: 浅岡健志郎、石塚政行、梅谷博之、木村英樹、西村義樹、フロリンダ・パルマヒル (敬称略)。さらに、林徹先生にはその後の「反省会」を含めてさまざまなコメントをいただいた。とりわけ、所有によって表現される所有権関係、親族関係、全体部分関係という 3 つの意味が、同一の形式で表現されることが驚きである程度に異なっている点を強調していただいた。その際のご指導をきちんと反映できたかどうか自信がないが、私なりの修正版をここに提示する。言うまでもなく本稿に残るいかなる誤りも著者の責任である。なお、本発表は科学研究費補助金 #15K16734 (代表: 長屋尚典)、#15H03206 (代表: 松本曜 国立国語研究所・教授)、#17H02331 (代表: 峰岸真琴 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授)、#17H02333 (代表: 田窪行則 国立国語研究所・所長) からの支援を受けている。

<sup>1</sup> 本稿で用いる略号は以下の通り: AV-actor voice, CV-circumstantial voice, EXC-exclusive, EXS-existential, GEN-genitive, LK-linker, LOC-locative, LV-locative voice, NEG-negation, NOM-nominative, P-personal name, PFV-perfective, PL-plural, POSS-possessive, PV-patient voice, Q-question, SG-singular, 1-first person, 2-second person, 3-third person, < >-infix, "="-cliticized.

## (2) May        pera    sa    mesa.

EXS/POSS money LOC table

「机にお金がある。」

このような所有文と存在文の形式的類似性は、日本語やタミル語などの諸言語にも観察され、所有文と存在文の隣接性を示唆するものとして言及されることが多い (Lyons 1967; Clark 1978; Freeze 1992; Dryer 2007:244ff; cf. “Localist Hypothesis”)。所有文とは人間を場所とする存在文であるという理解である。また、タガログ語の研究のなかには所有文と存在文の違いを、有生物の所有者か、無生物の存在場所かという有生性の違いだけに還元し、両者の共通点を強調する研究もある (Naylor 2005; Latrouite & Van Valin 2017)。このように言語類型論の見地からは所有文と存在文の連続性を強調する研究が多い。

しかしながら、本論文では、タガログ語の所有文と存在文の用法が大きく異なっている現象を観察しながら、形式的な類似性に反して二つの構文に意味的連続性はなく明確に区別されていると主張する。すなわち、所有文によって表現される3つの大きな意味 (所有権関係、親族関係、全体部分関係) はその具体的な状況においては大きく異なるものの、参照点能力に基づく特徴付けという共通点がある。一方で、このような性質は存在文にはない。さらに、この図式が、所有文・存在文のみならず、名詞句内における所有・存在表現、所有者述語文・場所述語文についても並行的にあてはまることを指摘する。

本論文の構成は以下の通りである。第2節でタガログ語の類型論的特徴を本稿に必要な限り紹介する。第3節で所有の類型論における所有述語 *may* の特徴について概説したうえで、第4節では所有文と存在文の構文的特徴と両者の違いを詳細に分析する。第5節では、その違いが限定所有表現、限定存在表現にも並行的に観察されると指摘する。さらに第6節では、所有物・存在物が定名詞句の場合に用いられる所有者述語文や場所述語文についても分析を適用する。最後に第7節で本稿をまとめる。

## 2 タガログ語の類型論的特徴と格体系

タガログ語はフィリピン共和国ルソン島中部マニラ首都圏およびその近郊地域で話され、オーストロネシア語族西マレー・ポリネシア語派に属する。主要部先行型言語であり、典型的他動詞文においては VSO の語順をとる。名詞句は格関係 (NOM, GEN, LOC)、名詞クラス (普通名詞 vs. 個人名)、数について名詞マーカーで標示される (表1を参照)。

表1 タガログ語の名詞標識

	主格	属格	場所格
個人名 (単)	si	ni	kay
個人名 (複)	sina	nina	kina
普通名詞	ang	ng [nag]	sa

一方で、動詞はアスペクト、動作主性、および「焦点」について語形変化する。タガログ語の動詞は焦点体系と呼ばれるヴォイス体系を持ち、形態的に *-um/-mag-* (行為者ヴォイス (AV))、*-in* (被動者ヴォイス (PV))、*-an* (場所ヴォイス (LV))、*i-* (その他ヴォイス (CV)) の4つの範疇が区別される。

本稿では、タガログ語が能格型の格標示を持つという仮説を採用する。すなわち、自動詞構文となる行為者ヴォイスにおいては NOM (自動詞文主語) あるいは NOM (自動詞文主語)-GEN (斜格語) という格標示を持ち、一方で、他動詞構文となる被動者ヴォイス、場所ヴォイス、その他ヴォイスにおいては GEN (他動詞文主語)-NOM (他動詞文目的語) という格標示を持つと分析する。このことを例文 (3) で確認する。

- (3) I-s(in)uot ng lalaki ang UNIQLO na damit nang mabilis.  
 CF-wear<PFV> GEN man NOM UNIQLO LK clothes GEN quick  
 「男は UNIQLO の服を素早く着た。」

(3) は *isinuot* という動詞から始まる動詞文であり、その後に、それぞれ属格標識 *ng* と主格標識 *ang* によって標示された二つの名詞句 *ng lalaki* と *ang UNIQLO na damit* が続いている。属格標識は *nang mabilis* のように副詞句も導く。<sup>2</sup>

タガログ語の名詞修飾は、修飾要素と被修飾要素をリンカーと呼ばれる語 (*na* あるいは *=ng*) でつなげることによって表現される。(3) の *ang UNIQLO na damit* 「UNIQLO の服」における *UNIQLO* と *damit* 「服」との関係がそうである。修飾要素と被修飾要素の順序は比較的自由であり、*damit na UNIQLO* としても意味は変わらない。この点、第5節で扱う限定的所有・場所表現と異なる。この原則は、(4) のような形容詞による名詞修飾でも同様である。

- (4) maganda=*ng* damit  
 beautiful=LK clothes  
 「美しい服」

### 3 言語類型論上のタガログ語の所有文

本節では、タガログ語の所有文について具体的に分析する前提として、この構文の言語類型論上の位置付けについて考察する。本論文が注目する *may* 所有文は、言語類型論的に見た場合、HAVE 型の叙述所有構文であり、“Existence-Topic” 型のイメージスキーマを基盤として成立していると分析する。さらに本節では、述語 *may* は、タガログ語のなかでも特別な位置を占める述語であることも確認する。

<sup>2</sup> タガログ語の *ng* は [ŋ] に対応するが、例外的に、属格の [naŋ] は *ng* と表記する。副詞標識や接続詞として用いられた場合は、正書法では *nang* と表記されることになっている。

### 3.1 所有のプロトタイプ

所有という概念はいかなる言語もそれを表現する手段を持っていると想定できる点で、普遍的な意味領域である。しかし、どういうものを「所有」と呼ぶかという点については言語ごとに大きく異なる。たとえば、Dixon (2010:262-263) は、英語の's や *of* を用いた所有表現の意味の広がり、所有権関係に始まり、全体部分関係、親族関係、人や事物の属性 (例: *John's temper*)、方向や位置 (例: *the front of the van*)、連想関係 (例: *Paul's dentist*)、名詞化 (例: *John's discovery*) にいたるまで幅広いことを指摘し、所有を意味的に定義することは難しいと述べている。

一方で、所有をプロトタイプの的に理解しようとする試みも存在する (Taylor 1996, Heine 1997 など)。たとえば、Heine (1997: 39) は所有のプロトタイプを、(あ)所有者が人間であり、(い)所有物が具体的事物であり、(う)所有者が所有物を使用する権利を持ち、(え)所有者と所有物が空間的に近い関係にあり、(お)所有には時間的な制限が想定されない、という5つの性質から構成されるものと主張している。さらに、Aikhenvald (2013) によれば、通言語的に、所有文によって表現される中核的な意味関係には、**所有権関係 (ownership)**、**親族関係 (kinship relations)**、**全体部分関係 (whole-part relations)** がある。

本論文では、この所有に対するプロトタイプのアプローチを採用する。具体的には、Langacker (2009) に従い、所有を、所有権関係、親族関係、全体部分関係をプロトタイプとし、**参照点能力 (reference-point ability)** を基盤とするものとして理解する (図1参照)。すなわち、所有において、所有者は支配域 (D) の中において所有物という標的 (T) に心的アクセスを可能にするための参照点 (R) となっており、プロトタイプのには参照点たる所有者が標的たる所有物に物理的あるいは社会的、経験的なコントロールを及ぼしているという理解である。

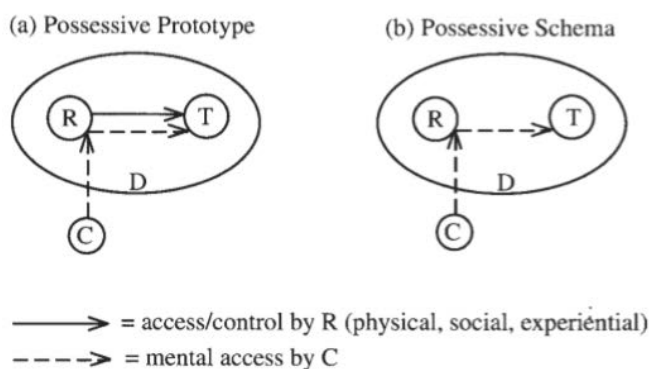


図1 所有のプロトタイプとスキーマ (Langacker 2009:84)

### 3.2 所有表現の類型論

世界の言語において所有を表現する形式的な手段として表2のような類型が存在することが知られている (Heine 1997, Stassen 2009 など)。<sup>3</sup>

表2 所有表現の形式的な類型 (Heine 1997 による)

	英語の例	タガログ語の例
限定所有	<i>John's car</i>	(5) <i>kotse ni John</i> (第5節)
叙述所有	a. HAVE 型 <i>John has a car.</i>	(6) <i>May kotse si John.</i> (第4節)
	b. BELONG 型 <i>This car is John's.</i>	(7) <i>Kay John ang kotse.</i> (第6節)

**限定所有 (attributive possession)** とは名詞句において所有関係が表現されている形式であり、英語の *of* や日本語の「の」などのような属格標識を用いたものがある。一方で、**叙述所有 (predicative possession)** は節によって所有関係が表現されている構文である。このタイプには大きく二つのタイプがあり、*John has a car* のように所有者を主語にした HAVE 型と、*This car is John's* のように所有物を主語にした BELONG 型がある。

この所有表現形式の類型をタガログ語の例で説明すると、以下の (5)(6)(7) のようになる。

- (5) *kotse ni John.*  
*car P.GEN John*  
 「ジョンの車」
- (6) *May kotse si John.*  
*EXS/POSS car P.NOM John*  
 「ジョンは車がある。」
- (7) *Kay John ang kotse.*  
*P.LOC John NOM car*  
 「(その) 車はジョンのだ。」

この論文、特に、第4節で主にとりあげる *may* を用いた所有文は、HAVE 型の叙述所有である。(6) のように、所有者がこの言語における主要文法項である主格名詞句として出現しているからである。一方で、第5節および第6節ではそれぞれ限定所有および BELONG 型の叙述所有を扱うことになる。例はそれぞれ (5) と (7) である。

<sup>3</sup> ここで示した用語法はあくまで代表的なものであり、たとえば、Langacker (2009) も用語法こそ異なるが同様の分類を提示し、限定所有、叙述所有について、それぞれ *nominal possession* 及び *clausal possession* という用語を用いている。

### 3.3 文法化の理論におけるタガログ語の所有文の位置づけ

世界の言語の所有表現を言語類型論と文法化の観点から考察した Heine (1997) は、世界の言語の叙述所有が基盤とするイベントスキーマのタイプとして表3の類型を提案した。

表3 叙述所有に用いられるイベントスキーマ (Heine 1997:47)

Formula	Label of event schema
X takes Y	Action
Y is located at X	Location
X is with Y	Companion
X's Y exists	Existence-Genitive
Y exists for/to X	Existence-Goal
Y exists from X	Existence-Source
As for X, Y exists	Existence-Topic
Y is X's (property)	Equation

この枠組みからタガログ語の *may* を用いた所有表現を捉え直すと、“Existence” のイベントスキーマに基づくものと考えることができる。(8)にあるように、*may* は場所を指定せずに存在のみを表現するためにも使える述語であり、その述語をこの言語の叙述所有構文は用いるからである。Himmelman (2005:139) の指摘するように、このこと自体は何もタガログ語に特殊なことではなく、オーストロネシア諸語によく見られる性質である。

- (8) May        God ba talaga?  
       EXS/POSS God Q really  
       「本当に神様はいる？」

さらに、所有者の表現が、場所格ではなく、タガログ語において定 (definite) な名詞句を標示することが多いとされる主格<sup>4</sup>で表現されていることから、“Existence-Topic” 型であると判定することができよう。すなわち、(9) のような存在表現から、主題化された所有者が付加されることで (10) のような所有表現が成立したということである。

- (9) May        treadmill sa bahay **namin**.  
       EXS/POSS treadmill LOC house 1PL.EXC.GEN  
       「私たちの家にはトレッドミルがある。」 (i.e., 借りただけで所有してないかもしれない)
- (10) May       treadmill **kami**            sa bahay.  
       EXS/POSS treadmill 1PL.EXC.NOM LOC house

<sup>4</sup> フィリピン諸語における主格名詞句と主題との関係については、Shibatani (1991) を参照のこと。



「私たちは家にトレッドミルがある。」(i.e., 所有している)

ここで、注意すべきなのは、Heine (1997:61-62) では“Existence-Topic”型の特徴として“it [=the possessor] appears as a topic or theme constituent in clause-initial position”と述べていることである。“clause-initial position”という記述を字義通りにとる場合、タガログ語の所有文は“Existence-Topic”型とは言えないかもしれないが、実際のところ、(11)のように、所有者は問題なく主題化することができる。

(11) **Kami,**            may            treadmill sa    bahay.

1PL.EXC.NOM EXS/POSS treadmill LOC house

「私たちは家にトレッドミルがある。」

このように文法化の理論から見た場合、タガログ語の所有文は存在表現を基盤として成立していると考えることができる。第4節では、このような歴史的に想定される所有と存在の隣接性にもかかわらず、両者の表現する範囲に大きな違いがあることを指摘する。

なお、Heine (1997:82) 自身は、Freeze (1992) のデータに基づきながら、タガログ語の *may* 叙述所有構文を“Location”型と分類している。すなわち、*Y is at X's place > X has, owns Y* という文法化を想定している。しかし、*may* は単に存在の事実を述べるのみで、特定の場所にあることを必ずしも意味しない。特定の場所にあることを表現するには第6節で導入する *nasa* を用いる。したがって、*may* 叙述所有構文について“Location”型のイメージスキーマを基盤とするという Heine (1997) の分析は支持できない。

### 3.4 述語 *may* の特徴

述語 *may* は、タガログ語のなかでも特別な位置を占める述語である。所有・存在という抽象的な意味を表現し、所有文なら所有者・所有物の二つの項をとる点で動詞に近く、一方で、(3)の *isinuot* のようにアスペクトや「焦点」について語形変化しない点においては動詞とは言えない。

このような動詞かどうか判断しかねる述語はタガログ語にはいくつかあるが、*may* のように複数の格パターン、すなわち、「*may* + 所有物 + 所有者 (主格)」「*may* + 存在物 + 存在場所 (場所格)」という二種類の格フレームを同時に持つ述語は他にない。また、存在文において主格名詞句が出ない事実は、タガログ語における主語をめぐる議論のなかでしばしば議論的となってきた (Schachter 1976)。

情報構造上の特徴としては、述語 *may* の直後に出現する名詞句は必ず不定 (indefinite) の解釈を受ける。具体的には、述語 *may* を用いた所有文の所有物、存在文の存在物は談話において初めて導入される参与者である (cf. 英語の *there* 構文)。<sup>5</sup>この述語を用いた所有文は、ある人物

<sup>5</sup> 述語 *may* を用いた文が名詞化された動詞句と一緒に用いられると絶対存在文になる。たとえば、*May hinihintay si John* 「ジョンは待っている人がいる。(lit. 「ジョンは待っている人を持っている。)」」、*May naghihintay kay John* 「ジョンを待っている人がいる。」のようにである。

についてその所有物が何々であると述べ、存在文は、ある場所についてそこに何々が存在すると述べるのである。もちろん、定の解釈をうける所有物・存在物というものも考えられるが、その場合は第6節で扱う所有者述語文・場所述語文を用いる。

### 3.5 さまざまな所有/存在述語: *mayroon*, *marami*, *wala*

所有文・存在文に用いられる述語には、*may* 以外にも、*mayroon* 「ある」「持つ」、*marami* 「たくさんある」「たくさん持つ」、*wala* 「ない」「持たない」がある。これらの3つの述語では、*may* と異なり、存在物名詞句・所有物名詞句を導くためにリンカーが用いられるが、所有文と存在文を主格と場所格の違いで表現し分ける点では同じである。

たとえば、*mayroon*、*marami* および *wala* を用いた所有文と存在文について、それぞれ(12)(13)(14)を参照してほしい。

- (12) a. *Mayroon=ng pera si John.*  
 EXS/POSS=LK money P.NOM John  
 「ジョンはお金がある。」
- b. *Mayroon=ng pera sa mesa.*  
 EXS/POSS=LK money LOC table  
 「机にお金がある。」
- (13) a. *Marami=ng pera si John.*  
 many=LK money P.NOM John  
 「ジョンはお金がたくさんある。」
- b. *Marami=ng pera sa mesa.*  
 many=LK money LOC table  
 「机にお金がたくさんある。」
- (14) a. *Wala=ng pera si John.*  
 NEG.EXS/POSS=LK money P.NOM John  
 「ジョンはお金がない。」
- b. *Wala=ng pera sa mesa.*  
 NEG.EXS/POSS=LK money LOC table  
 「机にお金がない。」

以下の考察では基本的に *may* を用いた文で議論を進めるが、その議論は他の3つの述語にも当てはまるものと考えてよい。



## 4 所有文と存在文のあいだ

本節では、前節までの議論を前提として、叙述所有文と叙述存在文の意味記述を行い、形式的な類似性や言語類型論による予測とは異なり、所有文と存在文が表現できる意味に大きな違いがあることを指摘する。特に、所有のプロトタイプと考えられる所有権関係、親族関係、全体部分関係は所有文によってのみ表現できる。所有文と存在文に意味的連続性はない。

### 4.1 所有文・存在文と有生性

所有文と存在文の意味的違いの検討に入る前に、まず、Naylor (2005) や Latrouite & Van Valin (2017) が想定するような「所有文とは人間を存在場所とする存在文である」という説明が破綻していることを確認しておこう。理由は大きく二つある。第一に、(15) のように無生物が所有者となっている所有文は存在するし、そのとき「擬人化」が起きているということでもない。

- (15) May        dingding ang    gusali.  
       EXS/POSS wall        NOM building  
       「その建物には (その一部として) 壁がある。」

第二に、所有物が有生物であってもよい。たとえば、(16) を考えてみよう。

- (16) May        Weng ka.  
       EXS/POSS Weng 2SG.NOM  
       「あなたには Weng がいる。」

- (17) May        Jesus Christ ako        sa    puso ko.  
       EXS/POSS Jesus Christ 1SG.NOM LOC heart 1SG.GEN  
       「私は私の心にイエス・キリストがいる。」

(16) では、聞き手が Weng という人物を (ふつう重要なパートナーとして) 持っているときに用いられる表現だが、所有物が特定の人間である。同様に、(17) では、イエス・キリストが所有されている。これらの例では、所有者が所有物を「使用することができる」「頼ることができる」という点において所有である。

このように、タガログ語の所有文と存在文の違いを有生性に還元することはできない。所有者が無生物のときもあれば、所有物が人間のときも (神のときさえ!) あるのである。両者の違いは有生性の違いではなく、もっと根本的な意味の違いなのである。

## 4.2 所有文と存在文 (i): 所有権関係と親族関係

数ある「所有」の意味のなかでプロトタイプとして考えられる所有権関係を表現する所有文から考えてみよう。所有権関係については所有文でしか表現できず、存在文の格フレームを使用すると非文となる。(18)を参照してほしい。

- (18) May bahay <sup>ok</sup>si/\*kay John.  
 EXS/POSS house P.NOM/P.LOC John  
 「ジョンは家がある。」

この例から明らかであるように、所有者である *John* は主格標識である *si* をとらねばならず、場所格標識である *kay* をとると非文となる。存在文にはなれない。

このことは、親族関係についても同様である。(19)を参照してほしい。やはり、親族関係の参照点たる *John* は主格で出現せねばならず、存在文の格フレームである場所格をとってしまうと文法的ではなくなってしまう。

- (19) May nanay <sup>ok</sup>si/\*kay John.  
 EXS/POSS mother P.NOM/P.LOC John  
 「ジョンに母がある。」

このように、所有権関係と親族関係は、所有文としてしか現れない。存在文として表現することはできない。二つの構文の間には大きな違いがある。

なお、タガログ語においては (20) のように固有名詞が場所格をとること自体は問題がないことに留意されたい。<sup>6</sup> (18)(19) においては、場所格自体が不適格なわけではなく、場所格で所有権関係・親族関係を表現することが不適格なのである。

- (20) Nag-bigay ako ng bulaklak kay John.  
 AV.PFV-give 1SG.NOM GEN flower P.LOC John  
 「私はジョンに花をあげた。」

## 4.3 所有文と存在文 (ii): 全体部分関係

次に、全体部分関係の場合について考えてみる。まず全体部分関係を表現する所有文の例 (21) を観察することから始めよう。ジープニーはフィリピンの公共交通機関の一つで、軍用ジープを乗客を乗せるために改造したものである。

- (21) May gulong ang dyipni.  
 EXS/POSS wheel NOM jeepney  
 「ジープニーにタイヤがある。」

<sup>6</sup> この点は鍛冶広真氏の指摘による。

(21) は、ジープニーという車両の不可欠の部分としてタイヤがあるという当たり前のことを述べた文である。このように、所有文は *dyipni* 「ジープニー」と *gulong* 「タイヤ」という全体部分関係を問題なく表現することができる。

では、この *dyipni* 「ジープニー」と *gulong* 「タイヤ」という二つの名詞句を存在文の格フレームで表現した場合はどうなるだろうか？ 実は、所有権関係や親族関係と異なり、非文ということはない。しかしながら、同じ全体部分関係のように見えても、所有文と存在文とでは表現される意味が全く異なる。具体的には、所有文は、分離不可能の関係および恒常的状态（つまり全体部分関係）を表現し、一方で、存在文は分離可能的関係および一時的状態を表す。単なる隣接的な所在関係を表現しているに過ぎない。所有文 (21) と存在文 (22) を比較しよう。

- (22) May        gulong sa   dyipni.  
       EXS/POSS wheel LOC jeepney  
       「ジープニーに (荷物として) タイヤがある。」

所有文 (21) と存在文 (22) においては、前者では主格が用いられており、後者では場所格が用いられている。両者の形式的違いはそこだけだが、しかし、この二つの文が表現している事象は全く異なっている。所有文 (21) は、ジープニーには車輪が備わっているという事象を表現している。ジープニーは自動車の一種なので当然のことである。一方で、存在文 (22) ではジープニーに積み荷としてタイヤがある (あるいはスペアタイヤがある) ことを表現している。

さらに、もう二組の例を観察しよう。同じような名詞句のペアであっても、全体部分関係が表現されるのは所有文のみであり、存在文でその関係を表現することはできない。

- (23) May        apat na paa ang lamesa.  
       EXS/POSS four LK foot NOM table  
       「机には足が4つある。」
- (24) May        apat na paa sa lamesa.  
       EXS/POSS four LK foot LOC table  
       「机には (机のものではない) 足が4つある。」
- (25) May        Nobel laureate ang Ateneo.  
       EXS/POSS Nobel laureate NOM Ateneo  
       「アテネオ大学にはノーベル賞受賞者が (所属して) いる。」
- (26) May        Nobel laureate sa Ateneo.  
       EXS/POSS Nobel laureate LOC Ateneo  
       「アテネオ大学にはノーベル賞受賞者が (今たまたま訪問して) いる。」

(23) はある机にその必須の部品として脚部が備わっていることを表現するが、(24) は机上に単独の机の脚部または切断された動物の足が一時的に存在することを表現する。同様に、(25) は恒常的所属を、(26) は一時的存在を述べる。

すでに観察した (15) ((27) として再掲) および、同じ単語の組み合わせを存在文にした (28) にも同じことが言える。(27) の *dingding* 「壁」は分離不可能な恒常的に存在するような壁であり、(28) のそれは分離された一時的に存在する壁である。

(27) May dingding ang gusali. (= (15))

EXS/POSS wall NOM building

「その建物には (その一部として) 壁がある。」

(28) May dingding sa gusali.

EXS/POSS wall LOC building

「その建物には (単独の・切り離された) 壁がある。」

このように、同じ全体部分関係を持つ名詞のペアが用いられていても、所有文と存在文とでは解釈が全く異なる。<sup>7</sup>所有文では、全体と部分が分離不可能の関係および恒常の状態を表現している。(21) (23) (25) (27) では、全体と部分が分かちがたく結びついており、空間的に、あるいは概念的に切り離せない関係にある。一方で、存在文は分離可能的関係および一時的状態を表す。(22) (24) (26) (28) における存在物は偶然その場所にあるだけであり、常に成立するとは期待されない関係である。全体部分関係ではない。所有文と存在文の表現できる範囲に重なりはない。

#### 4.4 「特徴付け」としての所有文

ここまで、タガログ語の所有文が表現できる意味に所有権関係、親族関係、そして全体部分関係があり、それらの意味は存在文によっては表現できないことを見てきた。それに加えて、ここでは、この言語の所有文には参照点たる所有者が標的たる所有物をコントロールするがゆえに成立する「特徴付け」があるということを指摘したい。

第一に、タガログ語の所有文が所有者についての特徴付けとなることは、既に見たように、所有文が *As for X, Y exists* という図式で表される “Existence-Topic” 型のイベントスキーマを基盤としていることから考えれば当然である。このタイプのスキーマを基盤としているのであるから、そこに特徴付けという性質があってもなんら驚くべきことではない。所有物の存在は所有者という主題についての評言である。

第二に、普通所有物を用いた所有文<sup>8</sup>によるイディオムの表現が存在することである。普通所有物とは、角田 (2009:159ff) の提案した概念であり、身体部位や属性のようにどのような事物でも、その事物である限りはふつう所有しているであろう事物のことである。たとえば、「象」にとって「目」や「鼻」、「大きさ」、「体重」などは普通所有物であるが、「首輪」「檻」な

<sup>7</sup> 所有文の意味論を考えるうえで全体文関係が重要な意味を持つことについては、浅岡 (2017) および石塚 (2017) も参照のこと。

<sup>8</sup> 浅岡 (2017) は、Dixon (2010:266) を引用しつつ、チェコ語において修飾要素の有無が普通所有物についての所有文の容認度の差となって現れることを報告している。

どはそうではない。タガログ語にはこの普通所有物を用いた所有文のイディオムがいくつもあ  
る。たとえば、(29)(30)(31) である。

- (29) May lagnat ang bata.  
EXS/POSS heat NOM child  
「その子どもは高い熱がある。」(lit. 「熱がある。」)
- (30) May itsura siya.  
EXS/POSS appearance 3SG.NOM  
「彼(女) はかっこいい(美しい)。」(lit. 「姿がある。」)
- (31) May utak siya.  
EXS/POSS brain 3SG.NOM  
「彼(女) は頭が良い。」(lit. 「脳がある。」)

このような普通所有物による所有文では、それらの所有物を所有しているというだけではなく、その所有物が特殊なものであるという解釈が強制される。たとえば、(29) においては子どもがおよそどんな生命体でも帯びているであろう熱を所有しているということではなく、その普通所有物である熱が「普通ではない」ぐらいに高いということを表現している。この背景には、ふつう持っているものを持っていると言ったところで特徴付けにはならず、何らかの異常なものであればこそ特徴付けになるということがある。つまり所有文に特徴付けは不可欠である。管見によれば、このようなタイプのイディオムは存在文にはない。

最後に、「所有文としての自然さ」に特徴付けとなるかどうかに関わっていることを示す例文が存在する。(32) と (33) の例文を比較してほしい。タガログ語のネイティブスピーカーによれば、微かな差ではあるが、前者は所有文として表現した方が自然で、後者は存在文として表現した方が自然であるという。<sup>9, 10</sup>

- (32) May dalawang bedroom<sup>ok</sup> ang<sup>/?</sup> sa bahay ni John.  
EXS/POSS two=LK bedroom NOM/LOC house P.GEN John  
「ジョンの家にはベッドルームが二つある。」
- (33) May dalawa=ng plorera<sup>/?</sup> ang<sup>ok</sup> sa taas ng lamesa.  
EXS/POSS two=LK vase NOM/LOC top GEN table  
「テーブルの上には花瓶が二つある。」

これは (32) の方が (33) よりも所有者に対する「特徴付け」としての度合いが高いからと考えられる。ベッドルームが二つあることはその家が大きいという特徴付けになるが、花瓶が二つあることはテーブルに何か新しい特徴付けをしたことにはなりにくい。

<sup>9</sup> このパラグラフに示した事実の観察は、Florinda Palma Gil 氏との議論に負うところが大きい。

<sup>10</sup> 西村義樹先生によれば、英語でも前者は *John's house has two bedrooms* と所有文で、後者は *There is a vase on the table* と存在文で表現することが自然であるという。所有文と存在文がこのような仕方に対立することはもっと注目されてよい事実であろう。

この文法判断の差は<sup>11</sup>、特徴付けとなっているかどうかという性質が所有文らしきの判定基準になっていることを示す例と言える。

## 4.5 まとめ

本節では、格フレームの違い以外は同じ形式を持つ所有文と存在文の表現できる意味が大きく異なることを指摘した。所有文は所有権関係、親族関係、全体部分関係を表現するが、存在文ではできない。とりわけ、両者が重なるかのように見える全体部分関係においては、両者の意味の違いは明らかであった。さらに、所有文には、存在文にはない「特徴付け」という機能もあることも指摘した。両者の違いは所有者=存在場所の有生性に還元することはできない。

## 5 名詞句における所有と存在

タガログ語の名詞句における所有は「所有物 + 所有者 (属格)」で表現し、存在は「存在物 + 存在場所 (場所格)」で表現する。やはり格の違いで表現し分けるのである。(34) と (35) を参照してほしい。(34) も (35) も後ろの名詞が前の名詞を限定しているが、前者は所有関係を、後者は場所関係を表現している。

(34) pera ni John  
money P.GEN John  
「ジョンのお金」

(35) pera sa mesa  
money LOC table  
「机のお金」「机にあるお金」

興味深いことに、これまで議論してきた所有・存在の違いが、名詞句内における所有表現と存在表現についても並行的にあてはまる。すなわち、両者の表現できる意味の範囲は異なっており、重ならない。

### 5.1 名詞句における所有権関係と親族関係

まず、所有権関係、親族関係は属格でしか表現できない。場所格を用いると非文である。それぞれ (36)(37) を参照してほしい。

(36) a. libro ni John  
book P.GEN John

<sup>11</sup> この違いは極めて微妙なものであり、㊟ (㊟; 「まるゆ」と読む) 記号を付すべきかもしれない。この記号は、学部4年生のときに受講した林徹先生の「野外調査法」において「コンサルタントを誘導した結果得られたかもしれないと自分で不安になったときにフィールドノートにつける記号」として先生が紹介してくださった。それ以来、私はフィールドノートの誘導が疑われるデータにこの記号を記入するようにしている。

「ジョンの本」

- b. \*libro kay John  
book P.LOC John  
「ジョンの本」を意図

- (37) a. nanay ni John  
mother P.GEN John  
「ジョンの母」

- b. \*nanay kay John  
mother P.LOC John  
「ジョンの母」を意図

このことは属性の持ち主や動作の動作主としても同じで、*pangalan ng lalaki* 「男の名前」、*kagandahan ng bulaklak* 「花の美しさ」、*pag-alis ni John* 「ジョンの出発」のように属格が用いられる。場所格は使えない。

## 5.2 名詞句における全体部分関係

全体部分関係をもつ名詞のペアの場合も (38) のように問題なく限定所有として表現できる。

- (38) drawer ng lamesa  
drawer GEN desk  
「机の (一部として装着されている) 引き出し」

同じ名詞のペアを場所格を用いた限定存在表現で表現しようとする、所有権関係や親族関係の場合と異なり、非文になることはない。しかし、限定所有表現 (38) と限定存在表現 (39) とでは意味が大きく異なる。前者では引き出しは机の一部だが、後者では引き出しは机の上にたまたま置かれているに過ぎない。

- (39) drawer sa lamesa  
drawer LOC desk  
「机の (上にたまたま置いてある) 引き出し」

このように全体部分関係をなすように見える名詞のペアでも、限定所有を用いたときのみ全体部分関係が表現できる。さらに、関連する例として社会的関係 (40) と身体部位 (41) を観察してみよう。

- (40) a. pasahero ng dyipni  
passanger GEN jeepney  
「ジープニーの (固定) 客」



- b. pasahero sa dyipni  
passanger LOC jeepney  
「ジープニーの (上に今乗っている) 客」

- (41) a. kamay ni John  
hand P.GEN John  
「ジョンの手」  
b. \*kamay kay John  
hand P.LOC John  
「ジョンの手」を意図

(40) では、属格を用いるとジープニーと客との間の恒常的な乗車関係が表現できるが、場所格を用いると客はジープニーにという場所を一時的に占めているだけに過ぎない。(41) は、属格を用いて身体部分を表現することはできるが、限定存在表現ではできないことを示している。

### 5.3 まとめ

本節では、名詞句のなかにおける所有表現と存在表現をめぐって、それらが所有権関係、親族関係、全体部分関係を表現できるかどうかを観察してきた。この三つの関係は限定所有構文によっては表現できるが、限定存在構文によっては表現できない。やはりここでも所有表現と存在表現の違いははっきりとしている。

## 6 所有者述語文と場所述語文

第3節で述べたように、述語 *may* を用いた所有文・存在文は、所有物名詞・存在物名詞が不定のときにしか用いられない。しかし、当然ながら、既に談話上明らかな所有物についてその所有者は誰々であると述べたり、あるいは、既に存在が確認されている物体についてその所在をどこそこと指定しなくてはならない状況は存在する。その際には、タガログ語では、(42) (43) のような所有者述語文・場所述語文が用いられる。

- (42) Kay John ang pera.  
P.LOC John NOM money  
「そのお金はジョンのだ。」  
(43) Nasa mesa ang pera.  
LOC.EXS table NOM money  
「そのお金は机にある。」

具体的に言うと、*Kanino ang pera?* 「お金は誰のですか?」あるいは *Nasaan ang pera?* 「お金はどこにありますか?」のように、すでにお金が存在することが分かっている、その所有者や

場所を尋ねるときには、(1) (2) のような *may* を用いた構文は使用できず、上記のような (42) (43) を用いるしかない。

形式的に見た場合、所有者述語文とは、(42) のように、「所有者 (場所格) + 所有物 (主格)」という形式をとる等位文である。英語で言えば、*The money is John's* のようなコピュラ文に相当する。既に述べたように、述語 *may* を用いた所有文が HAVE 型であるのに対して、こちらは BELONG 型である。一方で、場所述語文は、(43) のように、「存在場所 (*na* + 場所格) + 存在物 (主格)」という形式をとる構文である。同じく英語の *The money is on the table* に相当する。どちらも場所格を含むコピュラ文であるという点で、形式に類似している構文といえる。(1) (2) で確認した、所有文と存在文の類似性と並行的な関係にあると言ってよい。

しかしながら、このような形式的類似性とはうらはらに、所有者述語文と場所述語文の表現できる意味はかけ離れており、重なるところがない。具体的には、所有者述語文は、(42) のような所有権関係しか表現できない。(44) のような親族関係や (45) のような全体部分関係を表現しようとするとは非文となってしまうのである。<sup>12</sup>

(44) \*Kay John ang nanay.

P.LOC John NOM mother

「その母はジョンのだ。」

(45) \*Sa lamesa ang drawer.

LOC table NOM drawer

「その引き出しは机のだ。」

この観察は重要である。所有と存在のあいだを繋ぐ意味関係ともいえる全体部分関係がいずれの構文でも表現できないことは、タガログ語で二つの捉え方が乖離したものであることを示唆しているからである。<sup>13</sup>

<sup>12</sup> ただし、*Sa X ang Y* 構文は対句で用いられると「A は B に、C は D に」という意味のイディオムの表現として容認される。このとき、全体部分解釈は持たない。

<sup>13</sup> これに関連して、Taylor (1996) は英語の所有表現について、*X has Y* 型の表現と *Y is X's* 型の表現を分析し、後者においては、親族関係や全体部分関係が表現できず所有権関係しか表現できないことを指摘した。そのうえで、その事実が、所有権関係が英語の所有表現のプロトタイプであることの証拠となっていると主張した。しかしながら、ワークショップの準備段階の議論で明らかになったことだが、これは証拠とは言えないかもしれない。というのも、*Y is X's* 型を用いるための前提として、*Y* は主語として言語化しうる程度には心的アクセスが可能である必要があるが、親族関係や全体部分関係の *Y* は *X* なしにはそれができない (できないからこそ所有者という参照点が必要なのである)。また、文脈上 *X* なしに *Y* が指示できるような状況においては、そもそも *Y is X's* と言う必要がない。それゆえに、*Y is X's* 型は所有権関係しか表現できないのである。言い換えれば、*Y is X's* 型で親族関係や全体部分関係が表現できないことは、親族名称や部分名詞の意味の問題であり、所有そのものの問題ではないかもしれない。所有における所有権関係と親族関係/全体部分関係の違いについては Langacker (2009:83) も論じている。

## 7 おわりに

本稿では、タガログ語の所有文・存在文に注目し、その意味論的違いを分析することによって、言語類型論の文脈で強調される両者の形式的類似性に反して、両者の表現する範囲は大きく異なっていることを指摘した。すなわち、所有権関係、親族関係、全体部分関係は所有文によってのみ表現され、同じ名詞を利用しても存在文では表現できず、両者に意味的連続性はない。所有を存在に還元することはできない。さらに、その違いが、名詞句内における所有・存在表現、所有者述語文・場所述語文についても並行的にあてはまることを指摘し、上記の特徴がタガログ語の文法を貫く特徴であることを示した (図 2)。

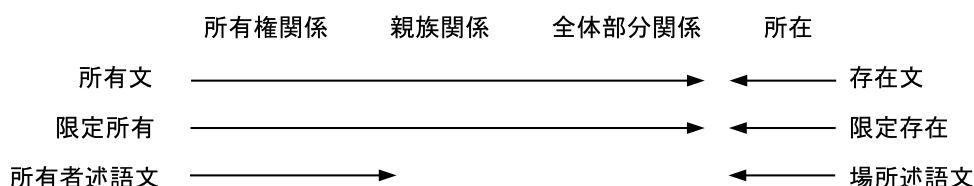


図 2 タガログ語の所有と存在のあいだ

こうして、タガログ語の存在と所有のあいだには埋めがたい溝がある。言語類型論の文脈で所有表現と存在表現に同じ形式が用いられる言語として言及されることの多いタガログ語であるが、個別言語研究としてその意味論を詳細に分析してみると全く異なる風景が見えてくる。

## 参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. 2013. Possession and ownership: a cross linguistic perspective. Alexandra Y. Aikhenvald & R. M. W. Dixon (eds.), *Possession and Ownership: A Cross-linguistic Typology*, 1-64. Oxford: Oxford University Press.
- 浅岡健志郎. 2017. 「チェコ語の所有文と存在文が表す全体部分関係」. 日本言語学会第 154 回大会, ワークショップ「所有の言語学: *To Have, or Not To Have*」, 首都大学東京, 2017 年 6 月 25 日.
- Clark, Eve V. 1978. Locational: Existential, locative, and possessive constructions. Joseph H. Greenberg, Charles A. Ferguson & Edith A. moravcsik (eds.), *Universals of Human Language*, Volume 4: *Syntax*, 85-126. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Dixon, R.M.W. 2010. *Basic Linguistic Theory*, Volume 2: *Grammatical Topics*. Oxford: Oxford University Press.
- Dryer, Matthew S. 2007. Clause types. Timothy Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description*, Volume 1: *Clause Structure*. Second Edition, 224-275. Cambridge:

- Cambridge University Press.
- Freeze, Ray. 1992. Existentials and other locatives, *Language* 68.3: 553-595.
- Heine, Bernd. 1997. *Possession: Cognitive Sources, Forces and Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Himmelman, Nikolaus P. 2005. The Austronesian languages of Asia and Madagascar: Typological Characteristics. Alexander Adelaar & Nikolaus P. Himmelman (eds.), *The Austronesian Languages of Asia and Madagascar*, 110-181. London: Routledge.
- 石塚政行. 2017. 「バスク語の位置属格と存在文が表す全体部分関係」. 日本言語学会第 154 回大会, ワークショップ「所有の言語学: *To Have, or Not To Have*」, 首都大学東京, 2017 年 6 月 25 日.
- Langacker, Ronald W. 2009. Possession, location, and existence. Ronald W. Langacker (ed.), *Investigations in Cognitive Grammar*, 81-108. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Latrouite, Anja & Robert D. Van Valin, Jr. 2017. Representing constructional meaning. International Conference on Role and Reference Grammar, The University of Tokyo, Komaba, August 1-3, 2017.
- Lyons, John. 1967. A note on possessive, existential and locative sentences. *Foundations of Language* 3 (4): 390-396.
- Naylor, Paz Buenaventura. 2005. On the stative predicate: Tagalog “existentials” revisited. Hsiu-chuan Liao & Carl R. Galvez Rubino (eds.), *Current issues in Philippine linguistics and anthropology: Parangal kay Lawrence A. Reid*, 419-435. Manila: LSP and SIL.
- Schachter, Paul. 1976. The Subject in Philippine Languages: Topic, Actor, Actor-topic, or None of the Above. Li, Charles (ed.), *Subject and Topic*, 491-518. New York: Academic Press.
- Shibatani, Masayoshi. 1991. Grammaticization of topic into subject. Elizabeth Closs Traugott & Bernd Heine (eds.), *Approaches to Grammaticalization*, Volume 2: 93-133. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Stassen, Leon. 2009. *Predicative Possession*. Oxford: Oxford University Press.
- Taylor, John R. 1996. *Possessives in English: An Exploration in Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- 角田太作. 2009. 『世界の言語と日本語：言語類型論から見た日本語』（改訂版）. 東京: くろしお出版.

## Notes on Existential and Possessive Constructions in Tagalog

Naonori Nagaya

**Keywords:** Tagalog, existential, possessive

### Abstract

In the context of linguistic typology, it has been repeatedly emphasized that possessive and existential constructions in Tagalog are formally similar in the sense that the special predicate *may* is used in both constructions. The only formal difference between them is that possessive constructions have a nominative-marked subject, while existential constructions do not. In this paper, however, I argue that the two constructions cover different sets of meaning despite the commonly assumed semantic contiguity between possession and existence (cf. Japanese, Tamil). In particular, subjectless existential constructions cannot express ownership, kinship relations, or even whole-part relations. Furthermore, this analysis can be extended to other domains of the Tagalog grammar, such as attributive possession and copular possession. The similarities between possession and existence are only superficial in this language.

(ながや・なおのり 東京外国語大学)